

聖書箇所：コリントの信徒への手紙一 3章 18～23節

### ○3章の流れ

・2:6～9でこの世の知恵とまるで異なる神の知恵を語り、2:10～16でこの知恵はただ霊によって理解できると主張したパウロ。パウロにとって本当に大切なのは、小賢しいこの世の知恵を誇りにして振りかざすのではなく、「神の霊」を受けて、「神のこと」を認識できるようにしていただくことだった。聖霊に自らを委ねる奥義を体得し、「神のこと」を認識させていただき、宣教に用いられていく人々をパウロは「霊の人」と表現する。

・しかしながら、当時のコリント教会の人々はといえば……、人々がそれぞれある宣教者を、本人に認められてもいないのに勝手に担いでグループを作り、仲たがいで争っているという状況。

→誰も「霊の人」の段階に達していないと厳しく指摘(3:1～4)

・そもそも宣教者とは何なのかということがよく分かっていないからこそこうした状況が生じたとパウロは考えた。そこでパウロは3:5から宣教者論を展開。「宣教者とは何者でもない。重要なのは神様であり、宣教者とはこの神様に仕え、神様のために力を合わせて働く者なのだ。教会という『神の畑、神の建物』のために働いていく者なのだ」と主張。そして、コリント教会の人々がそうしたことも弁えず、神様を頭としないでそれぞれ一人の宣教者を担ぎ回って党派争いをしている状況を鋭く批判。

・その中でも3:6～9では、宣教者論を展開するために農業の譬えが用いられていた。その主張は以下の通り。

▶福音は常に成長し続ける生命をその中に秘めた種。

▶その種をパウロが「植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神」である。

▶教会共同体は神の畑であり、宣教者はこの神様のもとで立場と役割を与えられて働く者なのである。

・このようにパウロは福音宣教者の立場と役割を、神様御自身の偉大な御計画と働きの中で正しく位置付けて説明。「植える者」も「水を注ぐ者」も決して福音宣教の中心的人物ではない。彼らは「成長させてくださる神」の道具に過ぎない。それゆえ、コリント教会の人々は福音宣教者に注意を集中するのではなく、彼らを用い、生き生きと働かれる神様御自身に目を向けて、すべての賛美と感謝を神様に献げるべきだと主張。

- ・3:9では、さらに教会共同体が「神の建物」と言われていたが、3:10から、パウロはさらに建築の譬えによって宣教者の責任について論を展開していく。
  - ▶自分(パウロ)は「熟練した建築家のように(教会の)土台を据え」た。それはイエス・キリストという土台である。宣教者はこの土台に人々の信仰という家を建てていくのであり、これが宣教者の責任である。「イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して」、自らのエゴを土台に教会を建てると、言語道断である。
  - ▶また、十字架につけられたキリストという正しい土台の上に教会という共同体を建て上げていくとしても、何によって建てるかでその姿は変わって来る。私たちが、自分の人生を、また教会を建て上げていく時に、何によって、何を素材として建てるかが問われる。終わりの日の裁きに耐えられるような素材、人間の感覚や常識に捕われるのではなく、終わりの日の神様の吟味に本当に耐えられる素材で宣教者は教会を建て上げていかなければならない。
- ・このように宣教者の責任について語ったパウロは、今回の聖書箇所(3:18~23)で再びコリントの教会のごたごた、信徒たちによる勝手な党派的動きに目を向けて、この問題に対する結論を語っていく。

### 【注解】

- 「だれも自分を欺いてはなりません。」(18節)
  - ・パウロはこのように語り、話をコリント教会のごたごたに戻す。
  - ・このごたごたの根本的な原因はこれまで述べてきたように宣教者についての無理解というのがあったわけだが、それに加えて人間の誇りというものがあった。神様に栄光を帰すことも忘れて、コリント教会のある人々が自分の知恵や知識などを誇りとし、他の人々を見下して裁くということがあったわけである。
  - ・しかし、これまでの議論からこのような自己認識、自己評価は誤りであることが明らかであり、そのように「自分はひとかどの者だ」と思い込むことは結局のところ「自分を欺」いているのである。4:3でパウロは「わたしは、自分で自分を裁くことすらしません」と語っているが、パウロにとっては自分で自分を評価し、判断しようとする事自体思い上がりであり(それは神様が為さることである)、神様の絶対的主権に対する反逆なのである。

○「もし、あなたがたのだれかが自分はこの世で知恵ある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。」(18 節)

・「この世」、それは己を神様の位置において自分を判断、評価して思い上がることに見られるように、自己中心・自己主張の原理が支配する世界である。しかし、教会の中においてはそうであってはならない。そこは神様が絶対的な主権を持っておられるという事実立ち、自らを捨てて神様に支配に服従する世界であり、相対的なものを決して絶対化しない世界である。

・そこでは「本当に知恵のある者となるために愚かな者にな」ることが求められる。神様ご自身がイエス・キリストの十字架において自己犠牲の道を現されたのであり、それこそが自己主張、自己神格化という悪霊の力から解放される唯一の道であることをコリントの教会の人々は知らなければならない。さらに、イエス・キリストの十字架に具体的に現された「神の愚かさ」が同時に真の知恵であり、この事実と与ることによってのみ人々は救われ、「本当に知恵のある者となる」ことができることをもコリント教会の人々は知るべきである。

○「この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです。『神は、知恵のある者たちをその悪賢さによって捕らえられる』と書いてあり、また、『主は知っておられる、知恵のある者たちの論議がむなしいことを』とも書いてあります。」(19～20 節)

・ここでパウロは聖書を引用して、自分の主張を裏付ける。

「神は、知恵のある者たちを その悪賢さによって捕らえられる」

→ヨブ記 5 : 13 からの自由な引用

こうしてパウロは、無に等しいものを頼り、誇る自称「知者」たちの「悪賢さ」自体の中に神様の裁きが既にあることを明らかにする。

「主は知っておられる、知恵のある者たちの論議がむなしいことを」

→詩編 94 : 11 からの自由な引用

「むなしい」とは、「効果がないこと」、「実を結ばないこと」を意味する。

こうしてパウロは、神様が自称「知者」を含めてすべての人の思いを知られ、何事も神様の御前には隠されていないと、神様の裁きの確実性を示す。

○「ですから、だれも人間を誇ってはなりません。すべては、あなたがたのものです。パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起こっていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなので

す。」(21～23 節)

- ・パウロはこれまでの長い論述の結論として、「だれも人間を誇ってはなりません」と勧告する。それは指導者を押し立てて喧嘩などしないで広い心を持ちなさいといった心の持ちようの問題では決してない。それは福音理解、教会理解を通してキリスト理解に直接触れる、まさに教会にとって生きるか死ぬかの決定的に重要な勧告であった。
- ・党派争いは結局のところ人間的名声になびく人間崇拜であり、そこから人間が人間に隷属するということが出てくる。それゆえパウロは人間的な名声を誇ることを戒めると共に、すべての人間が自由であると主張する。
- ・「すべては、あなたがたのもの」という表現はもともと「知者にすべてが属す」というストア哲学の主張であり、「知者はすべてのものの主」という意味の主張であった。おそらくこの主張はグノーシス主義者も用いていたであろうし、コリントの論敵たちも好んで用いていたものだったろう。
- ・パウロはそのような人間の自由の主張をここで引用し、「パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起こっていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの」と人間が自由であることを認めつつも、その自由のすべてをキリスト、さらに神様へと収斂させる。
- ・人間は自由な主体である。しかし、さらに唯一の主キリストと唯一の根源者である神様に帰属する者であることを忘れてはならない。すべての栄光と賛美はキリスト、また神様に帰せられるべきであり、そのような認識によって個人崇拜から来る教会内のごたごたは乗り越えられる。
- ・人間は他の人間の誰にも、何事にも隷属しない自由な存在であると同時にキリスト、また神様に帰属する存在。教会の一致はここにその根拠を持つというのがパウロの主張。

#### 【今回の聖書箇所から思うこと】

- ・人間の自由と責任について考えさせられた。
- ・人間は自由な主体でありながら、キリスト、また神様に帰属する「しもべ」としてこの世界に仕えていく責任を負っている存在。

cf. [キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人にも従属しない。

キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であって、何人にも従属する。]

(マルティン・ルター『キリスト者の自由』)

- ・人間に与えられた自由を神様の御旨のために用いていきたいと願う。